

東日本大震災一年間のボランティア記

北村社会福祉士事務所

代表 北村 弘之

2011年3月11日発生の東日本大震災。未曾有の津波被害と原発事故。被害が遭われた方々、また避難されている方のことを思うと、1年が経過した今でも、胸が痛む思いです。

今回、私が参加していますボランティア活動の内容をご紹介しますと思います。

私が参加している団体は、神奈川災害ボランティアネットワーク(以下 KSVN)といいます。ここは、阪神淡路大震災や中越地震のボランティア経験者が集まり、県社会福祉協議会等と組み、今後発生すると予想されています首都圏での大震災を想定して、実践を通して学ぶというもので、ボランティア同士の顔が見える活動を目指しています。これは、経験のある知り合いを作ることで、いざという時の災難に柔軟な連携ができることに目標があります。

KSVN の目的は、①現地での被災地支援(通称ボラバス) ②県内の避難者支援 ③被災地と派遣側の調整 ④県内住民への情報発信 ⑤ボランティアコーディネーターの養成等にありま

す。KSVN の活動はボラバス活動がメインで、私もその一員として参加しています。KSVN では昨年の大震災発生後に先遣隊を現地に送り、現地窓口との開設や支援状況の検討を踏まえ、5月より本格的にボラバスによる活動を始めました。今年3月末迄の11ヶ月間、バス220台と、のべ12,000名のボランティアの参加がありました。この規模は一団体では日本でも有数の規模のようです。参加者の顔ぶれは、定年を迎えた60代の男性や企業等を退職して次の仕事を探している30、40代の人、企業に勤めながら休みをとった人、学生等で、その多くは一人参加で「被災地のために」という想いで参加していました。そのような集団なので、愚痴を発することもなく、お互いに協調した行動が随所にみられました。私は6回の参加のうち、4回はリーダーとして運営にあたりましたが、参加者の自主性とモラルにいつも助けられました。

さて、ボラバスの運行は、大きく二種類があり、バス車中一泊で翌日活動し、その日の深夜に横浜に帰る宮城便(宿泊場所がないため)。もう一つは、バス車中二泊(往復)、現地二泊(または三泊で遠野市宿泊)する岩手便があります。私が参加した、第一回目の昨年5月の宮城便では、一輪車(4台)、スコップ(20ヶ)、土嚢袋(1000)、水(ポリタンク8ヶ)等をバスに積み込み、横浜を19:30に出発し、途中車内で仮眠をとり翌朝現地入りし、9:00頃から15:30頃まで力仕事をし、その夜23時に横浜に帰るとい

う強行軍のバス貸切りでした。また飲食やバス代は全て参加者がまかなうというものです。バス代は6,000円。飲食代や保険、現地のお土産代(地域貢献)など全部で1万円近くかかりました。参加数日前の事前説明会の出席は必須で、当日の仕事内容や装備、準備物等の話がありましたが、「現地に行ってみなければ、どのような作業になるかわからない、またトイレや水もわからないので各自持参」との説明に、参加者は大丈夫かなあという雰囲気。実際その時の活動先2軒のうち1軒は、水は出ましたがトイレは使えず、200m離れたもう一軒の活動先宅のトイレを借りました。

また、岩手便は、遠野市に宿泊所ができるまでは、山田町のボランティアセンターを兼ねた体育館に全国から集まった人とひとつ屋根の下で持参した寝袋で雑魚寝の共同生活でした。私にとって、3回目の活動は山田町でしたが、7月下旬ということもあり、暑さとブヨなどの対策が必要でした。畳の上に寝袋で睡眠をとるので畳の硬さと体育館のキシミの音、そしてイビキの音に多少敏感になった生活を送り、まるで山小

屋にいるような感じでしたが、消灯は 22 時で起床は 6 時と規則正しい生活を送りました。[写真②]もちろんテレビなし、そして飲酒なしです。あるのは参加者との話と新聞です。ここで知り合ったメンバーとは、その後も飲み会を開いたり、ボラ活動に参加したりしています。

それでは、どんな活動をしたのか、またどんな思いをしたのか、私の体験に合わせて記述いたします。

■ 宮城県亘理町 (5/10~11 宮城 1 便) 一般参加

ちょうど震災後 2 ヶ月目の活動。ある一軒の自宅のガレキ撤去に 17 名で伺いました。「この 2 ヶ月間、一人で水に浸かった畳や家財道具を処分してきたがもう限界になり、皆さんにお願いした」と家主の話。終了後「これで先が見えた」と感謝の言葉。一人での限界そして、支えあいの大切を認識しました。

■ 宮城県東松島市 (7/5~6 宮城 15 便) 運営スタッフとして参加

当日の作業は側溝のドロ出し。街中に我々約 30 名が入ると、我々の足音や人声で、あちらこちらの家から一人また一人と外に出てこられ、我々に「ありがとうございます」と労っていただきました。そして、休憩時にはお茶やドリンク、そしてさくらんぼなどを出していただきました。我々が元気をいただいた時でした。

■ 岩手県山田町 (7/18~23 山田 12 便) 運営スタッフとして参加

今回は住宅地のガレキの撤去の他、仮設住宅への資材搬入、保育園での補助、避難所の山田高校での風呂掃除、雨の日は写真洗浄と多彩な作業がありました。[①の写真]ガレキ撤去時、家主の方の差し入れをいただきました。その差し入れの購入先は、津波で残った「倉」を改造した店です。野菜から飲み物と生活用品を提供しており、残った地元の人にはなくてはならない存在でした。商売している人は自分のやるべきことを理解して、地元的生活を守っているとつくづく感じました。

■ 岩手県陸前高田市、大槌町、(釜石市) (8/22~26 岩手 29 便) 運営スタッフとして参加

被害面積が大きい陸前高田市。内陸からバスで入っていくと、海岸線より 5km 辺りから津波の痕跡が見え始めました。そして、中心部に近づくにつれ、残った鉄筋のビルが見え始めました。そして、残った高田の松 1 本が海岸線にぽつりと立っていました。松に向かって「がんばれ」という声を出したくなる光景でした。山田湾には「オランダ島」、そして大槌湾には NHK で有名なひょっこりひょうたん島のモデルとなったといわれる「瓢箪島」がありましたが、どちらとも大変な被害にあっているものの、その姿は残っており復興を目指す人の癒しになりそうです。

これら、三陸の市町村を支援している後方部隊は遠野市にある「遠野まごころネット」です。ここの佐藤代表の毎朝の我々向けの訓示です。「ここは被災地であって観光地でない。被災地に配慮し言動に十分配慮していただきたい。」

■ 宮城県石巻市 (9/6~7 宮城 33 便) 運営スタッフとして参加

工場などの産業集積地石巻市。震災で土地は 50~80cm 陥没しており、港に近い所では水が引けない場所が多いところでした。今回の活動場所は、港から 2km、石巻川から 200m の

ところにある「多福院」という曹洞宗の 500 年程の歴史のあるお寺の本堂掃除。すでに何回ともなく片付けに入っていることがわかるものの、高さ 5m ほどの津波に仏具や畳などが使えなくなり、別のお寺から寄進を受けて再建中と聞きました。

ここでは、生後 4 ヶ月の乳児を抱えたお嫁さんの、震災当日の生々しい話を聴くことができました。寺には数メートルの津波とともに車や家が押し寄せ、津波に浸かる車から泣き止まないクラクションがあり、そして流されていく人々の姿があり、まさに地獄のようだったそうです。そのお嫁さんは自分の子どもを何とかしたいと思い、最後は首に浮き輪のようなものをつけ、子どもだけでも助けてもらいたいと必死の想いが通じ、幸いにして 3 階で難を逃れたとのができたそうです。その後お寺は避難所になり地域の支援場所として欠かせない場所になりました。

■ 宮城県山元町 (4/24~25 宮城 87 便) 一般参加者として参加

7 か月ぶりの参加。一般参加のため、バスの隣席の初参加の同年代の人と知り合いになりました。これもボラバスのよいところ。どんな作業になるのかと思いきや、砂や石などが混載した側溝堀の仕事[写真③]。事前の説明会では、いちご農園の畑作業と聞いていましたが、まったくの力仕事。この時点に及んでまだまだ活動があることに驚きでしたが、依頼主の方の「行政にいくら声をかけてもダメだったので、ボランティアに依頼することにした」の話に、一同また来ますとの返事をしておりました。

震災後 1 年以上が過ぎました。この時点でのボランティア活動はガレキの撤去などに替わり、心の支援や高齢者の買い物支援などになっていますが、活動内容は替わっても我々ボランティアの役割は、住民ひとりではできないことを人の束で支援できることです。この束が住民の気持ちを動かし、また我々のやりがいになっています。自分にできる活動内容を通じて今後とも支援していきたいと考えています。



① 自宅跡のガレキ撤去
(山元町 2011 年 7 月)



②体育館での雑魚寝風景
(山田町体育館 2011年7月)



③山元町で側溝堀(大変な
重労働 2012年4月)

(上記は、昨年記したものに修正加筆したものです)

以上